



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍
Author(s)	北川, 誠一
Citation	北海道大學文學部紀要, 32(1), 109-161
Issue Date	1983-11-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33477
Type	departmental bulletin paper
File Information	32(1)_PR109-161.pdf



シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

北 川 誠 一

目 次

緒 言

第一章 シルヴァーンのモンゴル軍

第一節 イルハハン国初期のスイバ

第二節 シルヴァーン駐屯軍

第三節 イルハハン国後期のスイバ

第四節 イルハハン国末のダルバンド防衛軍

第二章 グルジスターンのモンゴル軍

第一節 スニト部万人隊

第二節 ケレイト部千人隊

第三節 トカルとクンチュクバル

第四節 スルドウス部の軍隊とチューバーン家のグルジスターン支配

第三章 シルヴァーンハシャー国、グルジア王国の自立

結 語

緒言

一二五六年フラグ・ハーンに率いられてイランに入った十万に及ぼんとするモンゴル軍は、一二五六年のイスマーイー
ル派、一二五八年のアッバース朝、一二六〇年のシリア等に対する作戦終了後も、モンゴリアに帰還することなくその
ままイランに駐屯し続けた。フラグはシリアから帰還すると北西イランに本拠を定め、事実上イル・ハーン国を樹立した。
この国家の首府は、最初マラーガ、次にタブリーズ、後に十四世紀にスルターニエに置かれた。これらの都邑は、イル
ハーンの夏冬の遊牧地の途中にあり、麾下のモンゴル軍は北西イランを中心に、ハーンの遊牧地と首府を取りまくよう
に、イラン各地に駐屯地を指定されたのである。

イル・ハーンは、支配地をモンゴル人王侯諸將に分割することをおこなわず、土着民に対する徴税行政とモンゴル軍人
に対する指揮、統制とを厳然と区分していた。しかし、それにもかかわらず、モンゴル軍の駐屯は、土着社会に政治的
社会的、経済的に重大な影響を及ぼした。

第一に、軍隊は、モンゴル人のシャフネ(ダルガチ)、多くイラン人の知事、徴税官の背後にあって、土着民の動静に
有形無形の圧力を加えていた。一旦住民にイル・ハーンに対する叛意が認められた場合、真先に鎮圧に派遣されるのは、
その地方に遊牧地を有する軍隊であつたからである。

第二に土着地方領侯、名望家とモンゴル人貴族間の通婚によって地域的な閥閥が形成された点を挙げることができ
る。これは両者の政治的関係の原因よりは、むしろ結果であるにしても、イル・ハーン国末期以後の地方政局分析の重要
な要素となつた。

第三に、モンゴル人は、単に軍人とその家族の集団であっただけではなく、基本的には自らの再生産のシステムを維持していた牧畜民であった。彼等はガザン・ハンの改革に至る以前は、軍人としての給与を与えられなかったのみならず、かえって飼育する家畜に税を課されていたのである。⁽³⁾先住者によって農耕、牧畜が行われていた地域は、新たにモンゴル人の遊牧地が設けられたため、大いに混乱や打撃を被ったであろう。

第四に、イクター制が実施され、モンゴル軍人に農地の占有(より厳密には特定の農地の生産物に対する徴税権)が許される以前はモンゴル人は農地を有していなかった。従って、彼等は農産物と手工業製品を得るために、経済的にであれ経済外的にであれユルト内外の農村、都邑と流通上の関係を有していたとしなければならない。そしてイクター制実施後は、両者の結びつきはいっそう強固になったであろう。

第五に、モンゴル人のユルトの設定、及び彼等の定住農耕民化は、西アジア各地特に北西イランの民族形成史の重大な要素である。モンゴル正規軍中には多数のトルコ系部族が含まれていて、彼等の定着は、その地域住民のトルコ化過程に一時期を画したのである。⁽⁴⁾

以上のような観点からイル・ハン国史を論述するには、最も基礎的な研究としてイル・ハン国各地のモンゴル諸部族の分布を明らかにしなければならない。本田実信「イル・ハンの冬营地・夏营地」は、歴代イル・ハンの遊牧地を明らかにし、北西イランのアッラーン、ムガーン、アーゼルバールイジャン、大アルメニアがフラグ・ウルスの『腹裏の地』(golun ulus)であることを証明するものである。⁽⁵⁾これらの地方には、モンゴル軍が重点的に配備され、オルドを中心に諸王、諸部族の遊牧地が割当てられたと思われるが、本田論文はその個々には言及していない。

ミノルスキー V. Minorsky は、アーゼルバールイジャンの地名からモンゴル語起源のものを収集し、スルドゥス⁽⁶⁾

Suldas、オイラート Oyrāt、ベクリーン Bekrim (或は M. Krim, M. Kriu) 等の部族の駐屯地を比定した。この研究は現在の地名とイル・ハン朝の年代記に見えるものを対照したものであるが、ミノルスキーが用いた『イラン地名辞典』の如き大規模な公刊資料の得難い今日のソ連領⁽²⁸⁾及びトルコ領諸地域、すなわち伝統的呼称によるアッラーン、ムガーン、シルヴァーン、グシュタスファイ、大アルメニア、グルジスターンについては別の方法に拠らなければならない。ところで、北西イランはイル・ハン国には本土でありながら、同時にキプチャク・ハン国との係争地で前線であるという事情にあった。キプチャク・ハン国は、チンギス・ハンがジョチに「モンゴルの軍馬の蹄の至る限り」の西方の地を与えたとして、アッラーン、アーゼルバールイジャンの領有権を主張したからである。歴代のイル・ハン⁽²⁹⁾は北辺に軍隊を配置してキプチャク・ハン国軍の南下に備えたが、この前線防備と両国間の征戦を巡って、シルヴァーン、グルジスターン地方守備軍の内、若干のものについては遊牧地を知ることができるのである。

小稿は、イル・ハン、キプチャク・ハン両国関係と、イル・ハン国内の事情に注意を払いつつ、イル・ハン朝、チムール朝のペルシャ語宮廷年代記、現地のグルジアの年代記によつて、シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍配備、すなわち部族遊牧地設定の状況について知るところを述べるものである。

なお、グルジスターンは、グルジア(ジョルジア)のペルシャ語名称であるが、十三・十四世紀のグルジア王国の領土は太古よりグルジア人が居住していたグルジア固有の領域とは異なるので、ここではグルジスターンの称を用いた。

第一章 シルヴァーン地方のモンゴル軍

イル＝ハン国第七代の君主ガザン＝ハンは、軍規肅清をめざする勅令の中で

我が国々の辺境は、ホラーサーン Khurāsān、ファールス Fārs、キルマーン Kirman、バグダード Baghdad、

ディヤール・バクル Diyar Bakr、ルーム Rūm、ダルバンド Darband、である (Pamuk/Arasade, III, 517)

と述べ、国防上の重要地域の一つにダルバンド⁽⁷⁾を挙げている。ダルバンドは、狭義には大コーカサス山脈がカスピ海に没する南北交通の隘路に存する一都邑名で、いずれの側の軍隊も敵国に侵入するためには、先ずダルバンドを制して、通過する必要があった。また広義には、この周辺の地域、さらにはシルヴァーン地方全体を指した。今、一二六二―三年、一二六五―六年の両国戦役の概略を記して、少しく戦略の実例を示そう。

先ず、一二六二年夏、キプチャク＝ハン国軍の前衛ノガイ Nugāy は、ダルバンドを容易に突破してシルヴァーン地方に至った。その時フラグ＝ハンは、アイトタグ Ait Tag の夏營地に居たが、一二六二年八月二〇日前衛としてシラムン Shirāmūn＝ノヤンを派遣し、自らも前線に向った。シラムンはサマグル Sāmāghūr＝ノヤンと共に十月一七―十一月一四日、シルヴァーン地方の主邑シャマハ Shamāha でノガイ軍と衝突し、撤退させた。十一月一四日、アバタイ Abatāy＝ノヤンの率るイル＝ハン軍増援部隊はシャバーラン Shābarān 近郊でノガイ軍を強襲した。フラグはノガイ軍の跡を追って、十一月二〇日シャマハへ出発し、翌月一二月八日ダルバンド城を再占領した。イル＝ハン軍は一二月一五日ダルバンド市の北で再度ノガイ軍に勝利した。シラムンとアバタイは追撃を続けてテレク河に至り、渡河してベルケのオルドを掠奪した。翌一二六三年一月一日、ベルケ＝ハンが同河左岸に現れた。イル＝ハン軍退却の際河の氷が割れ、多くの將兵が死亡した。この敗北によってイル＝ハン軍は一斉に退却し、フラグ自身は、バルダ Barḍa、經由で三月二三日タブリーズに帰った。戦闘は自然に停止した⁽⁸⁾。

次に、一二六五年一月九日、フラグは、ウルミヤ湖東方のチャガトゥ *Chaghatai* の冬營地で死亡し、長子アバガが汗位を継いだ。ベルケはこの間の政治的混乱に乗じて再度イルハン領に侵入した。この度の戦役にも先回と同じくノガイが前衛として派遣された。同年七月一九日新ハンの弟ヤシュムト *Yashmut* は勅令を奉じてノガイ軍撃滅のためにクル河を北に渡り、アクスー *Aqsu* 河で侵入軍を迎撃した。二月一日、ノガイは戦闘中片目に矢を受けて負傷し、シルヴァーンに撤退した。アバガ自身もノガイ軍撤退後クル河左岸に渡ったが、ベルケ本軍の接近を知って、クル河を再び渡りアラーン *Arran* に引き返した。ベルケはアラス河合流点の近くでクル河渡河を計画したが、イルハン軍の抵抗に阻れ、ティフリス *Tiflis* (トビリシ *Tbilisi*) 付近での渡河を望んで北西に進んだものの、同市近郊に至って病に倒れ、撤退の途中死亡した。⁽⁶⁾

この二度の戦役を見ると、ダルバンド城は最前線に位置する軍事上の要所ではあったが、この攻防が戦局に占める意義は少く、いずれの側も容易に突破し得た。キプチャクハン国軍が、一旦イルハン領に侵入した場合、主要な会戦はクル河付近でおこなわれたのであるから、イルハンにとってクル河こそが戦略上最も重要な地点であった。

ドーソンは、『集史』「アバガハン紀」の記事に拠って、一二六三年ベルケの撤退後「アバガはクル河の彼方に、ダラン・ナウル *Dalan (Valan) naour* から、デシエト・クルディアーン *Descht - Kurdian* まで、広い堀に囲まれた壁を設けた」と述べる (*d'Ohsson*, III, 419; 佐口訳、第五卷、八九頁)。アリザーデ博士は、自ら校訂したテキストで「クルデアン」を「*K. r. d. man*」と正して (*Paniz/Arnasade*, III, 419)「ゲルゼマン *Leprman* と読み、現在のアゼルバイジャン共和国イスマイル区(ライオン)に存する地名であると解した (*Arnasade, Souvalbno-ekonomicheskaya... str.*, 321)。すなわち、アバガはクル河に直角に「堡壘 (スィバ)」を設けたとする。一方故ボイル教授は、この「城柵 (*sibe*)」

が、「クル河左岸に沿って」建設され、この西端にダラン・ナウルが存したものとす (Boyle, *Dynastic history*, p. 356, 374)。三者共に主として、『集史』『アバガ・ハン紀』の記事に拠りながら、比定された位置は異なる。先ず、クル河防衛の要であった「スィバ」⁽¹⁰⁾の設置場所を明らかにし、次にそこに配置された軍隊について論じよう。

第一節 イル・ハン国初期のスィバ

アバガの事績を述べる前に、フラグが防衛のためにとつた処置を明らかにする必要がある。

ラシードディーンによると、一二六二―三年の戦役の後、フラグは戦闘の再開を予想して、全軍に武器と糧秣の用意を命じ、国境防備のためにシリア方面の前線ディヤール・バクル、ディヤール・ラビーア *Diyar Rabi'* にアミール・トゥダウン *Tuda'wn* を、東辺ホラーサーン地方に長子アバガを派遣し、更にダルバンド方面には、

スィバ *Sibah* の岸に至るまでのアッラーンとアーザルバイジャーンをヤシュムトに託した (*Pamuk/Amzade*, III, 91)。既に一二六三年のことを記した記事に「スィバ *Sibah*」の名が見え、フラグは二子ヤシュムトをスィバ以南の地方に置いたのである。また、『集史』には、一二六五年二月フラグの死が報じられると

ヤシュムトは、彼に属していたダルバンドとアッラーンの諸王国におり、父の死から八日目に(フラグが歿したチャガトゥ冬営地に)到着した (*Tam xre*, 100)。

とある。ここに言うダルバンドは地方名でシルヴァーンに同じであり、戦後一、二年の内にヤシュムトはこの地方を再び確保したのである。スィバはシルヴァーン、アッラーン両地方の間に置かれたように察せられるが、グルジアの年代記に、一二六三年の戦闘終了後の記事に次のように言う。

①一〇月が近づくと、フラグはグルジアの隣国シルヴァーンのチャラン・ウスリ Tchalan Ousuri すなわち白い河と呼ばれる場所に行った。その流れの岸にテントに周らした囲いを設け、それをスイバ Siba と名づけた。要するにベルケ・ハンの侵入を予期したのである。その時以来グルジア人とタタール人は一〇月から、夏の住地に出発する春までそこに留まるようになった (Brosset, I, 569)。

②グルジア人は白い河のほとりに柵を備えた囲いを設置し、既に述べたようにそこで冬を過した (ibid., 571)。

③一〇月が来るとハン(フラグ)はスイバに行き、王(グルジア王ダヴィティ)はそれに伴われた。次の春彼はサコ Saco (1) (スイヤーフ・クーフ Siyah Kūh) に行った (ibid., 571)。

スイバが設けられたと言うチャラン・ウスリ(モンゴル語 Chaghan Usuri)とは、トルコ語のアク・スーで、シャマハ西方を流れる河川に他ならない。先述のように、一二六五年再びノガイに率られたキプチャク・ハン国軍が侵入すると、ヤシムトは七月一九日に出陣してクル河を渡ったが、『集史』には、

アク・スーと呼ばれているチャガン・ムランの近くで両軍は衝突した (Рашид/Амсаде, III, 104)

とある。この戦闘でノガイが負傷、キプチャク軍は撤退したので、イル・ハンは、スイバで侵入軍を撃退するという所期の目的を達することができた。

フラグはアバガに先だってアク・スーに城柵を設けたが、その年次は、先に引用した『集史』、グルジア語年代記『モンゴル人侵入史』の記事から判断して一二六三年のことと見られる。またスイバなる語の元来普通名詞であることからして、当時既にこの名で呼ばれたであろうと思われる。またこの防御施設は、『モンゴル人侵入史』に「テントに周らした柵」とあるから、極く簡略なものであっただろう。

次に『集史』「アバガ・ハン紀」には、ベルケ軍の撤退後の記事に

六六四（一二六五年一〇月三日—一二六六年一〇月一日）年、アバガ・ハンはクル河のあちらの方面に、ダラン・ナウルから、ガルドマーン K. r. d. man の平原まで、クル河に接してスイバ Sipah (sic) を設置し、深い堀を堀るように命じた。モンゴル人とイムラーム教徒がその防衛のため駐屯し、諸方面から隊商がその近くに來た。

(Рашид/Ализаде, III, 104)

とある。また、『ヴァッサーフ史』には、

この後、アバガ・ハンは、彼等の軍隊と志気の大なることを知ったので、その世界を恐れさせる軍隊の侵入を妨げるために、ダルバンドのこちら側に一城壁 divari を引いた (Vassaf, 51)

とあり、キリキア・アルメニアの王族にして歴史家のヘトゥーム Hetum も (Hayton, 216)

アバガはスイバ Ciba と呼ばれる所に実に一日行程の堀と他の塹壕を造った。そこには通路を守る軍隊が置かれた。

とある。ダラン・ナウルはアラス河との合流点に近いクル河下流域であり、ガルドマーン (ゲルドマーン) は、アリザーデ教授が述べる如く、アク・スー及びこれと平行してクル河に流入するギルドマン・チャイ Girdman Chai 上流域の称である。両者の距離は約五〇キロメートルで、ヘトゥームの記す一日行程に一致する。⁽¹³⁾

グルジアの年代記は、フラグのスイバとアバガのスイバについて何らの区別をなさず、また、『シャイフ・フ・ウ・アイス』には、アブー・サイード・ハーンが、キプチャク・ハン国のウズベク・ハーンの侵入を阻止するためにアク・スーに防衛部隊を設置した記事が見えるので (Ahrî, p. 157) アバガのスイバは、フラグのそれと同じくアク・スー岸に建設

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

されたとすることが出来る。

さて、一二六五年の戦役においてベルケハンの率る大軍がクル河左岸に到着すると、アバガハンは対岸に防衛線を引いて敵軍の渡河を妨げた。アルメニア人僧侶キラコス・ガンツァケツィ Kirakos Gandzaketsi は、

双方は、向きあつて、城壁と堀で防備した岸辺に布陣した (Ханджян, 237)

と記し、アルメニア人のヴァルダベツト (博士) ヴァルダン Vardan Vardapet は、

そこに置かれていた (イルハンの) 軍隊は、おじ気づいてその場所に布陣し、シバル Shipar と呼ばれる堅固な塹壕を岸辺全体に沿って掘上げ、そして防備のためにあらゆる種類の用意を整えるのにその冬を費した (Dulaurier, Octobre-Novembre, 310)

と記す。クル河右岸沿いに防御陣地が築かれ、これは「シバル」⁽¹⁴⁾と呼ばれたのであるが、明らかに阿克・スーに沿って設けられたスイバとは別のものである。⁽²⁹⁾

フラグのスイバは、ノガイ軍を退けることができたものの、ベルケ自身の率いる大軍に対しては持ちこたえることができなかった。アバガは、フラグの阿克・スー防衛策を受け継ぎ、単一の軍事基地に過ぎなかったフラグのスイバよりはるかに大規模で、ダラン・ナウルよりガルドマンに至る長さ約五〇キロメートルに及ぶ大規模な城柵を設けたのである。

『集史』「アバガハンの紀」には、スイバが築かれ、アバガは

ダルバンドの国事から心が解放されたので、王子モンケテムル Mongke-Temür を、サマグルノヤン、オルジヤイ Öjaiニハトゥンと共に残し (Рашид/Алишад, III, 104)

てホラーサーンに向い、その冬はマーザンダラーンで過したとある。これと同じことを述べて、『シャイフ・ウヴァイス史』には、

アバガ・ハンはクル河の岸とダラン・ナウルからガルドムーン K. r. d. mun の平原までには、諸王子、サマグル、モンケテムル、ウルジャイ・ハトゥンが駐屯し、その場所が彼等の冬のユルトであるように命じた (Ahr. 135) とある。ウルジャイは、フラグのハトゥンであったが、父の死後アバガが娶っていた。モンケテムルは、ウルジャイが生んだフラグの第十一子で、一二五六年一月生れ、当時一〇歳であった。(Pauw/Amzade, III, 12; 96) 従ってモンケテムルは、何らかの国事の遂行を命じられたのではなく、ウルジャイのオルドがスイバに留められたので、母のもとに存ったに過ぎないであろう。従って古参の大將軍 (amir-i buzurg wa qadim) であつたサマガルが駐屯を命じられたのは、国境防備のためというよりは、むしろオルド警護のためであつたであろう。⁽¹⁵⁾ ウルジャイのオルドは、一二八九年アルグン・ハンが反乱を企てたブカ・チンクサン Buga Chinksank の逮捕を命じると、ブカは自分の家から避れて舟でクル河を渡りウルジャイのもとに保護を求めているので (Pauw/Amzade, III, 213-214) クル河左岸に置かれていたことが明らかである。

ラシードディーンは、スイバに「モンゴル人とイスラーム教徒」⁽¹⁶⁾を置いて防備に当らせたと記すが、フラグの時代と同じく、グルジア兵も駐屯を命じられた。『モンゴル人侵入史』には、一二七〇年から翌一二七一年と思しき記事に (Brosset, 384)

この後、ハンは、王ダヴィティを伴つてスイバに行ったが、王はそこで冬を過した。春が戻ると彼等は出発したが、王は腹の病に冒された。

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

とある。グルジア王ダヴィティ四世のみならず、アバガもこの冬をスイバで過したとするが、イル・ハンの冬営地ダラ・ナウルがクル河左岸にあったことを想起すべきであろう。

スイバはクル河左岸のウルジャイ・ハトゥンのオルドを防備する位置に設けられたのであるから、防御施設が築かれ、モンゴル人、イスラム教徒、グルジア人の軍隊が駐屯を命じられていて、本土決戦の際には重要な戦略的拠点たり得るとはいえ、これを国境の前線基地とは称し難く、ここに第一線部隊が置かれたとは考えられない。

第二節 シルヴァーン駐屯軍

それでは、ダルバンド防備の第一線部隊はどのように配置されていたのであろうか。『集史』「アバガ・ハン紀」には、アバガは即位式の後、

まず、弟ヤシムトを全軍と共に、その辺境を敵から監視するために、アルターン⁽¹⁷⁾ Altan 地方に至るダルバンド、

シルヴァーン、ムガーンの地方に派遣した (Рашид/Амзатде, III, 102)

とある。アバガのキシユラクの地に定められていたアッラーン地方の東及び北東のムガーン、シルヴァーン両州にヤシムトのユルトが置かれたのである。先に述べたようにフラグ生前に彼のユルトは、シルヴァーン(ダルバンド)とアッラーンであったから、この時ムガーンを得てアッラーンを失ったのである。これは、アバガの国境防備策の整備を意味しよう。

ヤシムトが、一二七一年七月八日死亡した後 (Рашид/Амзатде, III, 102) 誰に彼の地位とユルトが受け継がれたかは知られない。一二八八年及翌一二八九年のトレブカ Töle-Buga ハンの軍隊の小規模な侵入に対して、其々ブカ

チンクサンとクンジュクバル Qunjuqbāl トゥカル Tukai とクンジュクバルが前衛として派遣された (Pamuk/Amir, 208; 221) が、地位からして彼等が辺境防備軍の指揮官であったとは考え難い。

ガザンはハンの位に即くと、多くの財政上の改革を実施したが、軍規刷新、辺境防備体制の強化にも意をつくした。先ず、コーカサス方面の防衛については、『集史』「ガザン・ハン紀」に次のようにある。

(ガザン・ハン)は六九七年ズル・ヒツジャ月三日(一二九八年八月十二日)アミール・ヌーリンをダルバンド方面防備のためにアッラーン地方に派遣した (Pamuk/Amir, 328)。

発令地はタブリーズでガザンの次の冬営地はバグダードが予定されていた。⁽¹⁸⁾次に、四年後の七〇一年ズル・カアダ月(一三〇二年六七月)ウジャーノ Ujan で発布された勅令には、

アミール・ヌーリンは、先に定めたとうり、軍と共にアッラーンに駐屯して冬営し常にその方面にいるように (Pamuk/Amir, 348)

とある。次のガザンの滞在地はバグダードであった。この同じ時、クトルグシャー Qutluğ-Shah が、グルジスターンの守護を命じられている。一三〇三年二三月ヌーリンが任地アッラーンの冬営地で死亡すると (Tam xec, 353)、同年一月二二日(七〇二年ラビル・アッワル月末日)

アミール・クトルグシャーは、ユズ・アガチ Yüz Aghāj からアッラーンの冬営地に戻りその方面を防備するように (Tam xec, 360)

との勅令が下った。ガザン・ハンは、とりわけ、自分がアッラーンの冬営地に不在な折の留守居役として、ヌーリン、クトルグシャー⁽¹⁹⁾を任命したのである。従って、彼等が前線司令官に任命されたとも、ガザンはシルヴァーンを放棄して

クル河の線まで後進したとすることもできない。

ムスタウフィーの『心魂の歓喜』『地理編』には、シルヴァーンについて

イクターとして多くの地方が、分割されている (Mustaufi/Dabir Siyāqi, 107)

とあり、グシュタスフィーの項にも

そこに住む軍隊のイクターとして分割されている (ibid., 208)

とあって、シルヴァーン、グシュタスフィーには、モンゴル軍人のイクターが設定されたことが知られる。また後者には、実際に軍隊が住んでいたと明記されている。

ところで、七〇一(二三〇/二)年冬、ガザン・ハンはクル河の北に巡行し、「シルヴァーン、ラクズイスターン Lakzistān」の山中で狩猟を行った (Pamir/Amzade, III, 345) が、『集史』「ガザン・ハーン紀」には、

長い間堅固な山中に潜んでいたラクズイスターンの諸将は、その時、従い、自発的に降り来て、心から服従したとある。また『ヴァッサーフ史』には、七一八(一二三八/九)年、ジュチ・ウルスのウズベク・ハーンがイランに侵入した時

アミール・タルムターズ T. r. mtāz が、⁽⁸²⁾ Khāss の千人隊とともにラクザナート Lakzānāt の諸部族鎮圧と、その方面守護のために派遣されていた (Vassaf, 635)

とある。ガザンの治世期にラクズイスターン(ラクザナート)に対するイル・ハンの支配権が伸長したのである。中世のアラブ語、ペルシャ語文献に見えるラクズは、今日のレズギ Lezgi, Лезг, Лезгин に同じである。現在レスギ人の大部分は、ダルバンド以南のダゲスターンに住むが、孤立した居住域がアゼルバイジャン共和国北部に点在するところか

ら、かつては今日よりはるか南方にまで勢力を広げていたに違いない。従って「シルヴァーンとラクズイスターン」の山々とは、アゼルバイジャン共和国大コーカサス地区の山地であろう。すなわち、シルヴァーン、グシュタスフイにイクターを有していたモンゴル軍のヤイラクはこの地域に置かれ、従って彼等はクル河支流或いはスムガイト *Gymn-art* 河本支流に沿って夏冬の移動を行っていたと思われる。これがダルバンド守備の第一線部隊であろう。

第三節 イルハハン国後期のスイバ

ウルジュイトハンの時代には、モンゴル帝国のハン達の間には和平と再統一の気運が生じたが、ウルジュイト（一三一六年）、トゥクタ（一三一二）年、エセンブカ（一三一八年）と、相継いで所謂西方の三ハンが死亡すると、イルハンとキプチャクハンの間に戦争が再開された（cf. *d'Ohsson*, IV, 614 佐口訳第六卷二七四—六頁 *Howorth*, part 1, div. 2, 156-157, part 11, 590; *Boyle*, 408）。

七一八（一三一八／九）年、ウズベクハンは自ら大軍を率いてイルハン領に侵入した。イルハン側の第一線部隊は敵軍の強大さを知って撤退し、オールドに状況を報告した。『シャイフウヴァス史』には、

ウズベクハンは、……ダルバンドを過ぎ、シルヴァーンに来て、クル河の岸に至るまで掠奪を行った。川の向う側にいて渡ることのできなかった人々（*irkun* < *Mong. irgen* ?）は彼等の手に捕われた（*Ahr*, 150）

とある。また、『集史統篇』には、アブーサイドのもとには一千騎の兵士が残されていただけであったので、オールドの小姓、驛馬引き、駱駝番等をクル河の岸边に集め

人々がクル河の岸に真直ぐな線のように続てテントを張るように命じ（*Häfiz-i Abru*, 134）

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

手元に大軍がいるかのように見せかけ、アミール・チョパン Chupan の援軍来着を待った、とある。すなわちこの時アブーサイド・ハンには、スイバ防衛の準備が整っていなかったのである。

アブーサイドの存命中ウズベクは再度イラン侵入を企てたが、『シャイフ・ウヴァイス史』には、七三四(一三三三／四)年

このあと、ウズベクの軍隊の音声が上がった。帝王はバグダードとディヤール・ラビールの軍隊の一団がその年アッラーンに行き、アク・スーに駐屯するよう命じられた (Ahrī, 157)

とある。依然としてアク・スーがすなわちスイバが国防上の重要地点であり、ここに兵力を投入してキプチャク・ハン国軍のクル河渡河を阻止しようとする政策が採られていたのである。この時、アブーサイド自身もアッラーンに向ったが、ウズベク軍来寇を待たず一三三五年一月一七日カラバグで死亡した。アブーサイドに替ってアルバ・ケウン・ハーンがこの侵入に対処したが、『集史統篇』には、七三六(一三三五／六)年

その冬アルバ・ハンは、ウズベク・ハーンがアブーサイドの諸国を欲していたのでダルバンドに軍隊を派遣していた。彼が装備の整った無数の大軍と共にクル河に到着すると、あちら側からもウズベク・ハンの軍隊が河岸に到着していた。渡ることのできる各所を占領し、諸方面より各々誉れある軍隊は、大將軍達と共にウズベク・ハンの背後を断ち、勇氣を持って彼等を待ち伏せるよう心せよと命令が下った (Ḥafīz-i Abru, 191)

とあり、『シャイフ・ウヴァイス史』にも、ウズベク・ハンは、

再びイランを目差し、ダルバンドを通過してクル河の岸に来た。アルバ・ハーンもまた軍隊を率い、対峙して下馬した (Ahrī, 158)

とある。しかし、この時にはアク・スーで侵入軍を迎撃することには触れられていない。

アブーサイドの時代まで採用されていたスイバ防衛策は、アルバークウンの時代には採られなかったのである。

第四節 イル・ハン国末のダルバンド防衛軍

アブーサイド・ハンは、即位後各地の守護のために部将を派遣したが、『シャイフ・ウヴァイス史』には Bab al-abwāb には B. r. z. n. ki が (Ahrī, 150)

いた、とあって B. r. z. n. ki なる者がバーブル・アッバブすなわちダルバンド方面駐屯を命じられていたのである。また、ヴァッサーフも、ウズベク・ハン最初の侵入の際に、アミール・タルムターズがレズィギスターンに派遣されていたが、(Vassāf, 635)

(ウズベグの)軍隊の攻撃を知ったが、踏み留まる力を持たず、すべなくオルドに向った。途中その事件の連絡のために進んでいたアミール Z. n. si は彼と出逢い(敵の)軍隊の大きさについて報告した

と述べる。ヴァッサーフは、ガザン死亡時にガザンの大アミール・クトルグシャーより数えて一番目、ウルジェイト即位式には一四番目の高位の武将として T. r. n. taz の名を挙げ、彼がガザンの近臣(khass)であったと記す (Vassāf, 337, 456, 468, 471)。

また、カーシャーニーも、彼がガザンの

側近で近侍 (muqarrab va ināq)

であると述べ (Qāshānī, 94) ウルシェイトの大將軍達 umarā'i buzurg の一六番目に名を挙げて、ウイグル人であ

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

ると述べる (ibid., 9)°

またヴァッサーフは、ガザンの鷹匠 (Qushchī) の一人に Z. n. gi の名を挙げ、(Vassāf, 457) アブーサイドの万人隊長の一人に T. r. mtāz と共に Br. . z. n. gi の名を挙げる (ibid., 622)° Z. n. gi と B. r. z. n. gi は同一人物である。

アブーサイドはハンの時代に二人の万人隊長 T. r. m. tāz 及び (B. r.) z. n. gi がシルヴァーン州に派遣されており、前者が南、後者がダルバンド市に近い北部に駐屯していたのである。

『シャイフ・ウヴァイス史』には、一三二七年のチュールバーン一族の失脚後

ダルバンドは Iqinjī に与えられた (Ahrī, 155)

とあって、人事の移動が行われたようである。一三三六年に再度侵入したウズベク・ハンと戦った部将(シャイフ・チュールバーン) Shaikh Chubān ハッジ・ハムザ Hājjī Hamzah、ハマーリー Khamarī) の中には、イキンヂの名は見えないものの (Ahrī, 158)、同年ムハンマド・ハンが即位すると

シルヴァーンと前衛の万人隊 (tūmān-i qarāū) をイキンヂの息子シャイフ・チュールバーンに与えた (ibid., 164) とあり、この地方の軍隊が前衛の万人隊とよばれシャイフ・チュールバーンは、イキンヂの息子で彼の地位を継いだことが知れる。

またスレイマーン・ハンの在位の晩年に、『シャイフ・ウヴァイス史』には、チュールバーン朝のマリク・アシュラフをイキンヂの万人隊を与えられていたマリク・アシュラフ (ibid., 168)

と呼び、このマリク・アシュラフがタブリーズに入城する際(一三四三／四年)

ヤーギーバスティー Yāghī Bastī シャイフロッチューパーンとフサイン・アバンガイ Husain Abanghāy はマリク・アシュラフに合流した (ibid., 171)

とある。すなわちシャイフロッチューパーンの万人隊は、マリク・アシュラフの麾下に編入され、シルヴァーンから移動したのである。しかし、マリク・アシュラフはタブリーズに入城する前に彼らを殺した。

一三四六／七年マリフ・アシュラフは、シルヴァーンシャー・カーヴース Kāvus 膺懲の軍を出したが、カーヴースは、遠征軍阻止のためクル河の渡河点を固めたので、マリク・アシュラフの軍隊は渡河できず撤退した。また、ウズベクの子ジャニベクリハンは、一三五六／七年イランに侵入したが、イラン側軍隊の抵抗にあわずクル河を渡った (Hafiz-i Abri, 244; Abri, 177)。

これらの事実は当時クル河左岸には、モンゴル軍が存在していなかったことを示すものである。

第二章 グルジスターンモンゴル軍

アク・スーに設けられたスイバには、実戦部隊が配置され、ジュチリウルス軍の侵入に備えられたが、軍隊の駐屯は冬期間に限られたことは既に述べた。この地域は冬一日の平均気温零度前後と温暖であるが、七月には平均気温は二五度まで上昇するし、また、降雨量も少く、遊牧には不適となる。遊牧民はクル軍本支流を溯って冷涼な夏の牧地に移動しなければならぬ。⁽²¹⁾ここでは、ジュチリウルスに対してやはり第一線にあたるグルジスターン州(グルジア、ジョージア)にユルトを持っていたモンゴル軍について述べよう。⁽²²⁾

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

第一節 スニト部万人隊

『集史』『アバガハーン紀』には、アバガ即位後に行われた官職授与の記事に、

グルジスターンには、チオルマグン Jurmaghūn の息子シラムン Shirāmūn を派遣した (Pamiḍ/Amz3de, III, 102)

とあって、シラムンノヤンがグルジスターンに駐屯を命じられている。『モンゴル人侵入史』には、一二六九年夏、チヤガタイ家のテグデル王子がアバガに叛いた時、グルジア、サムツヘ Samskhe の領侯サルギス・ジャケリ Sargis Jageli は (Brosset, I, 576)

自分の軍隊の先頭に、アルタン Artan の山々に宿営に行く途中であったチオルマグンの子で勇敢かつ大胆な戦士シラムンノヤンと他のノヤン達を配置した

とある。アルタンはアルダハン (Artahan, Aparahan) に同じで、現トルコ領のカルス地方の地名である。ここにシラムンのヤイラークが存したのである。

シラムンの父チオルマグンは、スニト Sunit 部の人で、オゴタイハーンがジャラールッディーンホラズムシャー追討のため北西イランに派遣した探馬赤軍の指揮官であった。チオルマグン自身のユルトは、冬營地がムーガン、夏牧地がセヴァン Sevan (ギョクチャ Gökca) 湖周辺の山地であり、また一二四二年ごろ彼に替って指揮官の地位についたバイジュ Bāijuノヤンのユルトは、アラス河支流アケル Aker 河流域で、夏は上流のスイスィアン Sisian 地区に溯り、冬はアラス流域に下った。モンケは、一二五三年にフラグを西アジアに派遣すると、詔勅を發布してトルキスタンからアゼルバイジャンに至る牧地を遠征軍駐屯に備えて封禁し、バイジュの部隊をアナトリア東部に移動させた

Juvaini / Qazvini, III, 94; Рашид/Ализаде, III, 20, 39)。しかしこの時シラムンはバイジュと行を共にせず、アナトリアではなくグルジスタンに移動していたことが知れる。一方『集史』『部族誌』には、フラグはバイジュがルーム征服の功を誇ったので罰し

その万人隊をモンケルハンの勅書の權威によって、チョルマグンの子シラムンが治めたとある。シラムンはグルジスタンにユルトを置いたまま、チョルマグン、バイジュに属していた探馬赤軍中の一万人隊を率いたのである。

『モンゴル人侵入史』には、アバガの弟モンケテムルのシリア遠征(一二七七年)軍中に「シラムンの息子 Ebagan」の名が見える (Brosset, I, 597)。この時には、エブゲン Ebügen (ペルシャ語史料の Abūkān) がシラムンの地位を継いでいたのであろう。エブゲンはアフマド・テグダルルハンの側近 (nazdikān, muqarrabān) の一人であって、アルグンハン派部将のクーデター(一二八四年)の際には、アフマドの財産 (ughrug) の管理を命じられていた (Рашид/Ализаде, III, 180, 187)。『集史』『アルグンハン紀』には、クーデター成功の

この後、チョルマグンの子シラムンの子エブゲンは裁かれ、アフマドの側近であったという理由で処刑された。(中略) (アルグンハンは)グルジスタンを自分の叔父アジャイ Ajāy に与えた (Tam же, 199-200) とある。すなわちエブゲン刑死後のグルジスタン駐屯軍統制のためフラグの第八子アジャイが派遣されたのであるが、アルメニア人主教ステパノス Stepannos の年代記七三四(一二八五年)の項には、

Ajjen が死亡した (Hakobian, I, 48)

とある。アジャイがこの任にあったのは、約一年に過ぎない。また『モンゴル人侵入史』に、一二八九年、アルグンが

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

イメレチア *Imeret'i* に派遣した部將「シラムン^ニノヤンの子 *Gontchiba*」(*Brosset*, I, 607) の名が挙げられている。次に、『集史』「ガザン^ニハン紀」には、バイドウを敗つてハンの位に即いたガザンは

チョルマグンの息子シラムンの息子バライグート *Bāyghūt* をセコンバド *Seh Gunbad* で処刑させた (*Pamuk/Avrar*, III, 310; cf. *Vassaf*, 139)

とある。一二九五年までは、シラムン^ニノヤンの諸子がグルジスターンに駐屯し続けており、父の軍隊の指揮権を保持していたものと思われるのである。⁽²²⁾

第二節 ケレイト部千人隊

さて、『モンゴル人侵入史』には、先に述べたテグダル^ニオグルが、イル^ニハン領内で破壊掠奪行動を続けていた時、彼の一分遣隊は、

千人の騎士を率いている *Quormouch* なる者とその息子 *Araliqan* に属する種馬の群に行きあつた (*Brosset*, I, 582)

と記し、ディミトリ *Dimitri* 二世王統治年間(一二七三—八九月)の記事に (*ibid.*, 602)

アルタンとサムツへの間のジャヴァヘティア *Javakheti* の山々に住んでいた *Aliqan* の息子について記し、ダヴィティ六世王在位中(一二九二—一二三〇)の記事に

Aliqan の息子で、兄弟ブカをトゥカルに殺された *Gourmouchi* (*Brosset*, I, 614)

の名を挙げている。また *Aliqan* は、アフマド^ニハンの時代に要職にあったが、アルグンの身柄監視に當っていて、ク

―デター側武將によって殺害された。(ibid. 601) すなわち、アリカン、クルムン父子は、ペルシャ語史料の 'Alināq
Alināq ~ Alināq, Qurmishi ~ Qurmishi ~ Qurmishi に他ならない。

彼等は、ケレイト部 Altat 氏の人で、アリナクの父 Tükür 或いは Tüküz は、ビチクチとしてフラグに仕え、バ
グダードの戦利品接収に当った百人長であった (Pamir/Amzade, I-i, 285)。『集史』『部族誌』には、彼は「メルキ
ト部 Tudaglin 氏の人 Quch.r の千人隊に属したが、

Quch.r が死亡するとアリナクはまだ幼少であったが、フラグハンはクチュルの千人隊をアリナクに与えた
(Tamke, 286)

とある。アフマドはアリナクに娘 Kijük を与えて好適し (Pamir/Amzade, III, 167) たが、『ヴァッサーフ史』に
は、

グルジアの軍隊の長 (Mugqadam-i lashkar-i Gurj) で勇猛果敢な武士アリナクを使者に指名し (Vassaf, 118)
てアルグンのもとに派遣した、とある。アリナクは、グルジスターン軍指令官の地位にあったのである。しかし、アリ
ナクが、シラムンの万人隊を治めていたとする理由まではないであろう。

アリナクは一二八四年七月四日、アルグンハン側武將のクーデターに際して殺害された。『集史』『部族誌』には、

'Alināq の諸子は Qurmishi Kürkān, Qūtula, Bughāy-Arpah, Jāudar であつた (Pamir/Amzade, I-i, 228)
とあつて、クルミシが父の地位を継いだ。彼がグルカン(附馬)であつたのも、父の妻クジュクハトゥンを娶つたから
であろう。クルミシの名は、一二八八、一二八九年の両戦役には見えないが、一二八九年にはシラムンの子コンチバと
共にイメレチアに派遣されている。アルメニア人歴史家ステパノス・オルベリアンは、ゲイハトゥハンによって捕え

られ

我々の修道院タテフ Tat'ev に連行された大千軍隊長クルムチ Khurhumch' (Парканов, 56)

について記すので、イル・ハン交替の政変にかかわらず、千人隊長の地位を保持していたようである。アルグン・ハンの死後、ハン選出に関してオルドの重臣タガチャル、クンチュクバル、トゥカル等が陰謀をこらし、諸部将もゲイハトゥ支持派とバイドゥ支持派に分れたが、クルムシは、スルドス部のチューパンと行を共にしてゲイハトゥ支持にまわっていた。右の事件はゲイハトゥの治世後期のことと思われる。

やがてバイドゥがゲイハトゥを殺してハン位につき、ガザンとの間に争いが生ずると、タガチャル、チューパン、クルミシ、ブグダイ・イダチ Bugday idaji 等は秘かにガザンに臣従を誓い、ガザン軍が接近すると軍馬の調教を口実に持場を離れ、彼のもとに走った。『集史』「ガザン・ハン紀」には

トウダジュ Tudaju の万人隊に属していたアミール・チューバーンとアリナクの息子クルミシ・グルカンは逃げ、(ガザン)のもとに至った (Пашид/Амизаде, III, 199)

とある。トウダジュの父ドウルバイ Durbay は、アバガの時代にディヤルバクルの將軍であり、トウダジュ自身は、ゲイハトゥのヤルグチ、バイドゥのバグダド下總督であった (Там же, 102, 242; Vassaf, 172)。これ以後クルミシは、ガザン西進、アルスラン・オグル反乱軍鎮圧、グルシア王ダウィティ六世反乱の鎮圧、ガザンおよびウルジャイトのシリア遠征に加わって功績を積んでいる。

しかし、七〇一年ズル・カアダム月(一三〇二年六七月)ウージャーンで発布した勅令には、アミール・ヌーリーンはアッラーンで冬營し (Пашид/Амизаде, III, 348)

アミール・クトルグシャールは、軍隊を率いてグルジスタンに行くように

とある。ガザン即位以後、グルジア関係の国事にはクトルグシャールが当り、コーカサス山脈の奥地にまで出征しているから、早くより彼が、グルジスタン駐屯軍指揮官だったのである。

一方、クルミシ自身は、六九九（一二九九／一三〇〇）年のガザン・ハン第一次シリア遠征の折のヒムス Hims の戦いで二翼を率いている (Vassāf, 377)。明らかに彼が万人隊長の地位にあることを示している。また、ハーフィズ・アブル・ハシムはウルジェイト・ハンの時代、七一二（一三一二／一三）年のシリア遠征軍右翼の將軍六名中第五番目に彼の名を記す (Hafz-i-Abrū, 104)。また七一六（一三二六／七）年にウルジェイトがチャガタイ家のヤサウル Yāsāūr オグル援助のためにホラーサーンに派遣した四万余の軍の主將の一人はクルミシであった (Vassāf, 610-1; Qashanī, 214; Hafz-i-Abrū, 114; Saifi, 643)。この時代に万人隊長の位にあったものと思われる。

次に、アブ・サイードがハンの位に即くと、『シャイフ・ウウ・アイス史』には、有力な部將が各地の守護に任じられたが (Ahrī, 150)

グルジスタンにはクルミシがいた

とある。クルミシはグルジスタン軍の総師の地位に就いていたことが知られる。

ところが、七一八（一二三八／九）年のウズベク・ハン侵入の際、出陣命令を受けながら従わなかった部將には、戦後答刑が命じられたが、チュ・パイン・ソヤンは、この刑を峻厳に実施した。『集史統編』には、処罰された高位の部將の内、

アミール・アリナクの息子クルミシと、トグルルジェ Tughrilja の息子ガザンと、アミール・ブカイルドルジ

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

Id. r. j. の三名は、今やアミール・チューバーンは、我々を権力によって従えようと欲している。我々の父祖は決して彼の父の旗幟の下に進軍したことはなく、却って彼より地位が高かった (Hāfz-i Abrū, 144)

と謀り合い、チューバーン殺害の計画を練った。彼等はチューバーンの副官トグマク Tughmāq 前ディヤルバクル軍司令官イレンジン Irinjīn 等を味方に引き入れ、この計画を実行に移した。彼等の軍隊は、スルタニエに逃亡したチューバーンを追って前進したが、アブーサイドの支持を得ることができず、ザンジャーン Zanjān に近いミナレ・ダル Minara Dar でイル・ハン軍に敗れた。捕虜となったクルミシは審問の後処刑され、彼の息子アブドルフマンも父と同じ運命をたどった。 (Hāfz-i Abrū, 150' 志茂 二〇―二頁参照)

クルミシと謀議をはかったブカ・イルドルジは、ホラサーン太守時代のウルジェイトに仕えており (Qāshānī, 234) 彼がハンの位に即いて後は、七一二(一三一二／三)年のシャーム遠征軍右翼部隊六人の部将の最後に名前が見える (Hāfz-i Abrū, 104)。カラウナスのチューバーンの息子 (ibid., 150) という以外に出身は知れないが、万人隊長級の武将であつたろう。彼は捕虜となり処刑された。

主謀者の一人ガザンは、逃亡し、グルジスターンのアミール・アルクナ・r. q. nāy の城塞に保護されたが追討軍に打たれた (Hāfz-i Abrū, 160)。彼の父トグルルジェは、タングート人アジュ・スクルチ Ajū Sukurji の子、一二八九年のダルバンドの戦役出征者中にその名が見え、一二九五年のアルスラン・オグル Arslan Ughul の反乱鎮圧のためクルミシ、チューバーン等と共に出陣したが負傷して、クルミシの患護を受けた (Pauw / Amcaare, I-i, 329; III, 221, 305)。またガザン・ハンの第二次シリア遠征に加わった「万人隊、千人隊の諸将」の中にトグルルジェの名が見え、「トグルルジェの千人隊」の語も見える (Vasaf, 374, 378)。彼は万人隊長でないにしろ、少くともかなり上位の

地位にある千人隊長であったようである(志茂、一二三―四頁参照)。

次にチュープンの副官であったトグマクについて、『ウルジェイト史』のウルジェイトの大アミールのリストに(Qashānī, 9)

二三番、側近(ināq)のアミール、トウグマーク Tūq, māq。君側(muqarrabi-hazrat)にあるヒタイ人トカジヤク T. kajāk の息子。

とあるが実は父は Kajāk ~ Kunjak であって(ibid., 28-29; 177)、チュープンの家臣ではなく、身分上はイルハンに直屬する高官である。

イレンジンは、ケレイト部のワシロハンの曾孫で、イルハン家の婚族であり、ウルジェイトの宮廷では第六番目の高位を占めていた(Pauya / Amzade, I-i, 272; Qashānī, 9 志茂、一二七―八頁参照)。『ヴァッサーフ史』には、ウルジェイト死亡の時(一二三六年十二月)

大將軍イレンジンはグルジア人のもとに(dar Kuri)いた(Vassāf, 623)

とあって、彼のキシュラクもグルジスタンにあったことを示している。すなわち、グルジスタンにユルトを有していた有力な武將の四名までがクルミシと共に滅ぼされたのである。⁽²³⁾

第三節 トカルとクンチュクバル

一二六二年の戦役、一二六九年のテグダル・オグルの反乱鎮圧関係の記事にアバタイ Abatāy・ノヤンの名が見える。彼はコンキラート氏人で、フラグに従ってイランに遠征し、『集史』『アバガ・ハン紀』には、「古参の大將軍 umarā-i

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

buzurg-i gadim」の一人に数えられている。息子達にナルブル Narbur、ウトマン Vutman、クトルグ・テムル Qutluğ Timur があり、ウトマン、クトルグ・テムルは各々ブルガン・ハトゥン Bulghān khātun、キラマン・ハトゥン Kīramān khātun をイル・ハンの室に入れている (Pauw / Amzade, I-i, 398; III, 8, 196)。アバタイ自身は、六七九年サファル月(一二八〇年六月)に死亡したが (Tam xē, III, 153)、『集史』『アルグン・ハン紀』にハンは

また、その時、アミール・クンジュクバル Qunjuqbāl に恩寵を賜い、祖父アバタイ・ハンの地位、すなわち中軍のアミールの職を与えた (Tam xē, 209)

とある。アルグン、ゲイハトゥ、バイドゥ三代の治世期にタガチャル Taghachar、トゥカル Tūkal と共に国政を断した万人隊長クンジュクバルはアバタイ・ハンの孫である。一族がイル・ハンの外戚であるばかりか、彼自身アルグン・ハンの長女ウルジタイ Uljay を娶った (Tam xē, 197)。

彼のユルトは、『ヴァッサーフ史』に、ゲイハトゥがハン位に即くためルームからイランに来るといふ情報を得ると、バイドゥを擁立しようとしていた

クンジュクバルは逃げ、熟慮のためアラタグ Alātāq に行った (Vassāf, 257)

とあるので、ヤイラークは大アルメニアに、キシュラークは恐くアラス河の温暖な河岸にあったであろう。一二八八年、九年のジュチ・ウルス軍侵入に先陣を命じられているのも、キシュラークがオルドと近かったことを示している。

クンチュクバルは、バイドゥと運命を共にし、ガザン・ハンに処刑された。ウルジタイはジャライル部のアクブカ・ノヤンに与えられた (Pauw / Amzade, III, 197, 300)。

トゥカルは、クンチュクバルと同じく、アルグン、ゲイハトゥ、バイドゥ三代にわたって宮廷で高い地位を得た武将

であった。『集史』『部族誌』の記載にはないが、「フラグ＝ハン紀」には、フラグの六女クトウルカン Qutlqan は、(Tam xce, 16)

ドウルベン Dürbän 氏のウルグドゥ Uǧtuノヤンの息子イスブカ Yisubūqā＝クルカンに与えられ、彼が死亡すると息子トゥカルが娶った

とある。イスブカの没年は六六五（一二六六／七年）であるが (Tam xce, 16)、『イル＝ハン国』の年代記にトゥカルの活動が述べられるのもこれ以降である。またトゥカル自身は、アルグン＝ハンの次女ウルジャテムル Uǧa Timur を娶っている (Tam xce, 197, 306)。彼女は、トゥカルがガザンの命令で処刑されると、マングート部のクトルグシャー＝ノヤンを再婚した。

『ヴァッサーフ史』には、バイドゥが即位を望まないのを知って、彼を擁立しようとしていたトゥカルとクンチュクバルは、ゲイハトゥの報復を恐れ、『集史』『ガザン＝ハン紀』には、(Tam xce, 294)

トゥカルはそれを不快として引返し、家のあったゴルジスターン地方に行ったとある。また『モンゴル人侵入史』には、ダヴィティ六世即位（一二九二年）間もなく

王ダヴィティのもとにアララットの山々に住むハン＝(sic) トゥカルのもとに行くように誘う急使が来た (Brosset, 1, 613)

とあり、トゥカルがガザン側の武將クルミシに殺されると

王ダヴィティは、同じくオス人の諸侯バレジャン Baredjan に託されアテニ Ateni に置かれていた (トゥカルの) 息子達、武器と財産の全部を引渡した (ibid., 616)

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

とある。トゥカルのヤイラクは、グルジスターン州の南部でグルジア領アルメニアのアララット地方の山地である。アテニにキシユラクがあつたとは思われないが、ここはトビリスイ北西約六〇キロメートル、ゴリ地方の溪谷の村である。

アラクス河上流に、コンキラト、ドウルベン兩附馬家のユルトが存したが、彼等は、ガザン登祚の政変によつて除かれたのである。

アラス河は、中流兩岸にカラダグ *Qara Dağ*、カラバグ *Qarabagh*、カバン *Qapan* 等、上流にアララット、アラダグのヤイラク適地を持ち、中流域にナクチェヴァン、下流にアッラーン、ムーガーンの温暖なキシユラクを有していた。今日もここにはシャフセヴァン、トルコマン等の遊牧民集団が見られる。ここには明らかに他にも多くの軍隊のユルトが設置されており、アバタイノヤン、ウルグトゥノヤンのみならず、チャガタイ家のテグダルノオグル、ジュチ家の、トゥタル、バラガイノオグルのユルトも同河流域に設けられていた。

第四節 スルドウス部の軍隊とチューバーン家のグルジスターン支配

ウルジュイト、アブーサイド両ハンの元帥 (*amir al-umara'*) であつたチューバーンノヤンは、スルドウス *Sulduş* 部の人であつた。『集史』「部族誌」に (*Paunū/Amisade, 1-i, 454-5*)

スンジャク *Sunjak* ノヤンはフラグとともにイランに来て、ヤルグチ、右翼の千人隊長、宿営の武將 (*amir-i Kezik*) を務めクケロイルカイ *Kukā Ilkāy* の次席に座した。彼の兄弟にケフティ *Kinti* ノヤン、アラテムル *Arā Timūr Idachi'*、トゥダウン *Tudaun'*、テムルノブカ *Timūr Būgā* があつた

とある。スンジヤクの兄弟中トゥダウン・バハドルは、一二七七年四月、アブルスターン Abulustan でスルタン・バイバルスのマムルーク朝軍と戦って敗北した万人隊長であった。チューパーンはこのトゥダウンの子マリク Malik の子である。(Tam xec, 454)。彼は、クルミシと共にトゥダジュの万人隊に属し、バイドゥとゲイハトゥの支持者の間でハン位が争われた時にゲイハトゥに組し、ガザンが挙兵すると逸速くその幕下に参じ、バイドゥ軍との戦闘、アルスラン・オグルの反乱鎮圧に功績があったことは既に述べた通りである。

彼の地位はウルジェイトが即位すると著しく引き上げられ、ガザン・ハン以来のアミール・ルウマラーであったクトルグシャールに次いで第二の高位と「大將軍、タジーク人とトルコ人の總帥、正義王 (amir-i buzurg, muqaddam-i Tazik va Turk, Khusrâu-i 'Adil) の称号を与えられている (Qashani, 8)。また、一三〇七年のギラン親征軍の編成を見ると、チューパーンの率るスルドウス部の部隊は、四個に編成された全部隊中の一つであった (Brosset, I, 636-7)。

彼のユルトは、『集史統編』の既に述べたクルミシの反乱直前の記事に

アミール・ルチューパーンはグルジスターン方面に向った。兵士は各自の目的地に向った。アミール・ルチューパーンは長子アミール・ルハサンを荷物 (ughrug) と妻のもとに留め、自分は若干の騎士を連れてコクチュ・デンギス Kukia Tugiz に向った (Hafiz-Abru, 144)

とあり、後にチューパーンの孫マリク・アシュラフに会うためにルームよりナヒチュヴァン経由でカラバグに向った人々は、

アミール・ルチューパーンのヤイラークであったガスレ・タラグ Qasr-i Tâg とコクチュ・デンギスに (Hafiz-i

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

abrū, 222; cf., Samargandi, 192)

到着したと記す。チューパーンのヤイラークはゴクチェ・デンギズ(デニス)すなわちセヴン湖の岸に存したのである。またオグルークを置いていたキシユラークは、オルドに近いクル河岸だったろう。

クルミシの反乱後、グルジスターン軍の総帥の地位については、『シャイフrouヴァイス史』に

シャイフrouマフムードをグルジスターンに派遣した (Ahrī, 151)

或いは、

シャイフrouマフムードはグルジスターンを降した (ibid., 152)

とあり、『集史統編』に

アミールrouチューパーンの息子達の中にアルメニア Arman とグルジスターンの支配権を与えられていたシャイフrouマフムードがいた (Hāfz-i Abrū, 183; cf., Samargandi, 70, 83)

とあって、チューパーンの第四子シャイフrouマフムードに与えられたのである。

チューパーンが一三二七年に失脚すると、シャイフrouマフムードも捕えられ、処刑された (Ahrī, 155; Hāfz-i Abrū, 139; Samargandi, 13) が、

グルジスターンはクトルグrouシャアの息子イクボールrouシャアに与えられた (Ahrī, 155)

とあって、シャイフrouマフムードの地位は、ガザンのグルジア軍指揮官で、ガザンとウルジェイトのアミール・ウマラーであったクトルグrouシャアの息子イクバルrouシャアに与えられた。

ところが、同じく『シャイフrouヴァイス史』に、七三四(一三三三/四)年冬、アブーサイドrouハンがバグダードで

冬營中

アミールロシヤイフリハサンはグルジスタン方面に行くようにとの勅令が下り、アミールはその方面に赴いた (ibid, 157)

とある。ジャライル部のハサン(大ハサン)がグルジスタン軍の指揮を命じられたのである。しかし、彼は間もなくルーム總督に転じ (ibid, 157)、グルジスタンでは、チューパーン家の人々の勢力が強大となる。

チューパーンが、ウルジェイトウリハシンの娘サティベグ Sati Bik との間になしたスルカン(・シラ) Sorgan(Shira) は、大ハサンがグルジスタンに派遣された時に母と共にアッラーンのカラバグにいた (Samargandi, 127; 149)。アブーサイドが死亡すると(一二三三五月)、彼はウ克蘭ジ Ukrani ウルトウクシャー Urtug Shah ラシードウッディーンの子ギヤースッディーン・ムハンマド等と企つてアルバークェウンをハン位につけた。しかし、七三六(一二三五／六)年ムーサー Musa を支持するオイラート部のアリー・バードシャーの軍にアルバが敗れるとスルカンはグルジスタンに逃げた (Hafizi-Abri, 149-150)。ジャライル朝の大ハサンは、アリー・バードシャーに抗すべくムハンマドを擁して挙兵すると(一二三三六年)、彼は大ハサンに組し、勝利の後カラバグの入口からグルジスタンの入口までを与えられた (Ahri, 164)。

一二三三年チューパーン家のハサン(小ハサン)が大ハサンをバグダードに追つた時もタブリーズに留まり、実母サティ・ベグが即位すると、小ハサン、アリー・ウ克蘭ジ、ウルドゥブカと共にアミール職を与えられた (ibid, 166)。この間もスルカンのムルトはグルジスタンにあったが、七四一(一二四〇／一)年にはイラク・アジャミーを与えられて、ライに去った (Ahri, 168; Samargandi, 156)。

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

かつてのグルジスターン総督シャイフ・マフムードの子ビール・フサインは、大ハサンの武將であつたが、大ハサンと小ハサンとの間に戦闘が生じた時には後者に味方した (Ahrī, 166: *Ḥafẓ-i-Abrū*)。『集史統編』には、この後スレイマーンをハンに擁立した小ハサンは、

イラク・アジャミー、アーザルバーイジャー、アッラー、ムーガーと自分の従兄弟でシャイフ・マフムードの子ビール・フサインと兄弟達が持っていたルームに至るまでのグルジスターンを把握し、所領とした (*dar qubsa-i tassarf va iqtadār dar avard*)。アミールロビール・フサインは、能う限りの多勢の者とともにカルス *Qār's* 地方に向つた (*Ḥafẓ-i-Abrū*, 208)

とある。この時までシャイフ・マフムードの子のビール・フサインがグルジスターンにいたが、小ハサンにここを開けわたしたカルスに移動したのである。彼の兄弟達とは、シールーン *Shirūn*、チャマガーン *Ch. m. ghān*、ドフアーン *Du ākhān* である (ibid., 183)。ビール・フサインはこの後ファールス総督を命じられたが、在任中小ハサンによつて毒殺された (ibid., 183, 208, 214, 219)。

小ハサンが暗殺された(一三四三年)後、息子のマリク・アシュラフが北西イランの支配権を得たが、『集史統編』には七四八(一三四七/八)年、アーザルバーイジャーのカラバグに大アミールで、大軍を擁してグルジスターンに居たアミール・ジダーイ J. day が全馬群と共にマリフ・アシュラフのもとに來た (ibid., 227)

とある。マリク・アシュラフは、カラバグの冬營地からダブリーズに向う途中、本營に伺候した高位の武將でグルジスターンを支配していたジダイを、この後謀殺し、彼の従者を掠奪させた。ジダイについては、七四四(一三四三/四)年にスルカンがマリク・アシュラフと争つた時後者に組し、スルカンの戦列を破る功を上げている (ibid.,) 他に知ると

ころはない。考え得ることは、彼がマリク・アシュラフの譜代の臣ではなく、同盟者であつて、マリフ・アシュラフの統治権内の異質な要素であつたので、マリク・アシュラフは将来彼が自己の権力の敵対者となり得ると考えて除いたのであらう。イル・ハン國中後期に、グルジスタン軍の司令官であつたシラムン・ノヤンの子孫、アリナク、クルミシ・グルカン父子等は政変叛乱の際に処刑され、オルドの重臣であつたトゥカル、クンチュクバルも失脚した。チュール朝の時代には、ソルカン・シラ、ピール・フサインの子シャイフ・マフムード、アミール・ジダイがこの地方にいたが、彼らも次々と移駐、謀殺を被つたのである。

第三章 シルヴァーン・シャー国、グルジア王国の自立

歴代イル・ハンがシルヴァーンとグルジスタンに配備した軍隊は、次第に配置転換、領袖の没落等部族編成改変の理由となるような事情に至つたことは既に述べた。

『集史統編』には、グルジスタンのセヴァン湖に近い一城塞に籠城していたアミール・ガザンの反乱が鎮圧された七二〇(一三二〇/一)年冬

そのころ軍隊から、「その方面に定められていた諸城の守備隊と前衛が減少し、ここは辺境であるので彼等はこの為常に危険にさらされている。兵員に不足が生じ、軍人が(定数より)少いのは望ましくない」という報告があつた。スルターン・アブーサイドは彼等の言を取り上げ、全軍がその方面に行き、またスルターンの命令によつてその州の知事(hakim)である大副官(mushih-i-buzurg)となるように決定した(Hafz-i-Abri, 160)

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

とある。また、アブドルラザク・サマルカンディイ・Abd al-Razzāq Samarqandi の年代記七二二(一三二二)年の項には同じことが、

スルターンは、その方面の軍隊な充分であるように、スルターン・ウルジュイトウの命令によってそこにあつた知事 (hakim) は、その地方の司令官 (farman-farma) であるように、また諸地方の情報を集めるように、と命じた (Samarqandi, 53)

とある。辺境軍の減少が報告されたので、兵員の再配備、新たな任命によらないで各地方軍の司令官はそのまま留任すること、情報集収に意を用る等のが命令されたのである。

ところで、マフムード・ハンを擁立して、北西イランの支配権を得たジャライル朝のシャイフ・ハサンは、一三三八年度の部將にユルトを分配したが、『シャイフ・ウヴァイス史』には次のようにある。

シャルール Sharūr とドヴィン Dvin をナフチヴァーンに至るまでアクジ Akji の息子ハサン・ベクに、カラバグの入口からグルジスターンの入口までをアミール・スルカンに、シルヴァーンと前線をイキンジ Iqinj の息子シャイフ・チューパーンに、ムーガーンとバールーン Bārūn の千人隊を自分の息子ユースフ・シャーに与えた。

(Ahrī, 164)

シルヴァーンにシャイフ・チューパーンがグルジスターン東部にはスルカンが派遣されたのである。グルジスターンには先に述べたピール・マフムードの諸子、及びアミール・ジダイがいたはずであるが言及されていない。ところがチューパーン朝のマリク・アシュラフの支配権が確立して、彼がタブリーズに入城し新王朝の基礎が置かれた七四八(一三三七)年、アブドルラザク・サマルカンディイは (Samarqandi, 224)

アーザルバハイジャーンとイラク・アジャムとアッラーンとムーガドンとグルジスターンの一部とクルディスターンとトルクマーンの諸部を武將に分け与え、必要な国事を定めた

と記す。シルヴァーンには言及されておらず、グルジスターンも一部のみが分配されているだけである。また、『シャイフウヴァイス史』には、同年バグダード遠征に失敗したマリク・アシュラフは (Ahrī, 173-4)

再びタブリーズに入城した。彼は百頭の飢えた狼をアーザルバハイジャーンとアッラーンに放した。彼等は各人が望むところのを行い、住民は命からがら国を捨てた。あるものはギーラーン、シルヴァーン、キプチャイク草原に行き、いくらかの者はグルジスターンに行った

とある。すなわに、シルヴァーンとグルジスターンはマリク・アシュラフの放った百頭の狼すなわち徴税吏から自由であつたのである。(Cf., Amzarg, 377; Nabai, 279-316)

また、マリク・アシュラフの領土を占領したジュチ・ウルスのジャンニ・ベクの子でイラン總督に任命されていたベルディ・ベクが本国に撤退(一三三五年)すると、マリク・アシュラフの子アヒジューク Akhijūg が父の旧臣を糾合して、支配権を樹立したが、『シャイフウヴァイス史』には (Ahrī, 180)

彼はアーザルバハイジャーンをアシュラフ朝の武將達に分割し、各人に一地方を与えた。アミール・シャール・ラフダール Raddār をククジャク Kukjak、ピール・フサインと共にアッラーンに遣した

とある。アーザルバハイジャーンとアッラーン以外については言及されておらず、シルヴァーンとグルジスターンにはアヒジュークの支配権は及ばなかったものようである。

シルヴァーン、グルジスターン両地方からモンゴル軍が移動したことによって、モンゴル人政權と土着地方政權との

関係はどのように変化したであろうか。これらのモンゴル軍はジュチウルス軍の侵入に対する防衛軍としての役割を果たしたと同時に、占領軍として、駐屯する地域に混乱が生ずればただちに出勤して鎮圧掃討を行う機能を有したからである。

大コーカサス山脈がカスピ海に没するシルヴァーン地方は一二世紀よりキスラーニー *Kisrānī* 朝のシルヴァーン＝シャアの支配下にあった。フラグ＝ハンがイランに到着した時、当時のシルヴァーン＝シャアがオルドに伺候したことは知られるが、その後一三三〇年代に至るまでのシルヴァーンの動静を示す史料はきわめて僅少で、かろうじて君主シルヴァン・シャアの系図がたどれるに過ぎない。ペルシャ語年代記に再びシルヴァーン＝シャアの行動が見えるようになるのは、チューパーン朝の時代になってからである。

その最初は、七四五（一三四四／五）年ケイコバード *Kaīqubād* の息子で、父に代って実質上君主の地位を与えられていたカーウス *Kāūs* がカラバークのマリク・アシュラフのオルドに伺候した記事である。

カーウスは、マリク・アシュラフが臣下の一武將を処刑するのを目撃して恐れ、本国に逃げ帰ったのであるが、これは、七四七（一三五六／七）年、七四八（一三四七／八）年の二度にわたるチューパーン朝のシルヴァーン遠征の原因となった。アブドルラザク・サマルカンドイは、最初の遠征について

カーウスが河岸に來たので、アシュラフには、事が成立なかつた。彼等は互に和を結んで、離れた (*Samargandī*, 223)

と記して、シルヴァーン＝シャア軍は、アシュラフ軍のクル河渡河を阻止したことを述べる。二回目の遠征軍はクル河は越えたものの、カーウスを捕えることも殺すこともできず、各地を荒掠したに過ぎなかつた (*Hāfiz-i Aburū*, 227;

Samarqandi, 224; cf., Amuzade, 376-7; Nabai, 295-8)。

マリク・アシュラフはシルヴァーンに駐屯軍を持たなかったから、遠征軍の武力のみによってはシルヴァーン・シャーを支配することは既に困難になっていたのである。七四五年カーウス来朝の折、マリク・アシュラフが、彼に全き榮譽を与え、金糸の帯、帽子、金飾りの剣を下賜し、毎日彼に接見の名誉を授けた (Hafiz-i Abru, 225) のはこの理由によるものであらう。

次に、マリク・アシュラフの子アヒージュークが父の殘党を集めて支配権を打ち立て、アッラーンを自己の武將に与えた時、ガンジャ Ganja の住民はカーウスに救援を求めた。カーウスは息子ヌールダル Nurdar を派遣した。シルヴァーン軍がクル河のジュイー・ノウでチューバーン朝の軍隊を敗り、アラス河まで進撃した後、両者の間で和平が結ばれ、カーウスはシルヴァーン、アヒージュークはカラバグに戻った (Abru, 180)。すなわちこの時、シルヴァーン・シャーは、チューバーン朝の権力から完全に独立していたのである。

また彼は、ジャライル朝シャイフ・ウヴァイスの時代に二度にわたってカラバグに遠征し、多くの住民を捕虜としてシルヴァーンに連れ帰った。これは、シャイフ・ウヴァイスの懲罰遠征を惹起した (七六八—一三六六／七年)。しかし、遠征には成功したものの、ウヴァイスは、カーウスに七六五(一三六三／四)年以來の臣従關係の再確認を求めたにすぎなかった (Amuzade, 378-9)。

一方、グルジスタンは、アッラーンの側面に位置してカフカース山中のダリヤル峠を押え、シルヴァーンと共にイラン本土防衛の牆壁であった。王都トビリシにはモンゴル人の總督(シャフネ・ダルガチ)が置かれて治安維持に、イラン人徴税官 (vali) が税務に當った。また、本稿に述べたごとく多数のモンゴル人がこの地方の内部にユルト

を割当てられていたが、彼等は占領軍であつて、一旦反乱が起これば、最初に動員された。従つて、イル・ハンの權力が弱まり、クル河流域のモンゴル軍兵力に減退を見始めたアブーサイドの治世期以降、グルジア王国の政治的活力は飛躍的に高まつた。『モンゴル人侵入史』には次のように記されている。

(一)イランのモンゴル人の間に分裂が生じたので、ギオルギ Giorgi 光輝王(在位一三三四?—一三四六年)は、グルジアからタタール人を追放した。或る者は策略によつて、また或る者は武力で、総て彼の領土から姿を消した。(中略)彼は軍隊を集めるとラン(アッラーン)に入つた。そこでは何の抵抗にも逢わなかつた。そこからシルヴァーンに行き、勝つてティフリス(トビリスイ)に歸つた(Brosset, I, 646-7)。

(二)彼の支配権は次第にモウカン(ムガン)、ラン、ソムヘト Sonkhéth (アルメニア)に固まつた。それらは彼に定期的に貢納を納めた。彼の領土内にタタール人は残つていなかった。全グルジアは秩序が整えられて法の下に臣服し、ニコプシアからデルベンドに至るまでのローカサスの住民、ラン、モウカカン、シルヴァーン諸シャフは彼の属臣であつた (ibid., 648)。

モンゴル軍がグルジスターンから押し出され、グルジア王は、最盛期タマラ女王の治下と同じく、シルヴァーン、アッラーン、ムーガーン、アルメニアに宗主権を及ぼすようになったと記されている。グルジア語年代記の記事がどこまで正確であるかは、他の史料との対比を必要とするが、アブーサイドの晩年より混乱と分裂に陥つたイランのモンゴル人は、クル河左岸を制圧することができず、少くとも王の晩年、すなわちチューバーン朝の時代、グルジスターンには、モンゴル人の支配権が及んでいなかったことは既に述べた。

ジャラーイル朝は、グルジア王に対する宗主権を保持することができたが、シルヴァーン・リシャールに対するのと同

様、それはほとんど名目的なものであった。(cf., Lang)

アブサイドの末年にシルヴァーン、グルジスターンのモンゴル軍は、兵員の不足をきたしていたが、イルハン国が崩壊して、有力武將が傀儡のハジを次々と擁立する時代になると両地方のモンゴル軍部隊は各地に転戦を余儀なくされ、あるいは内訌によって解体された。こうしてモンゴル人がクル河の北から去った後、シルヴァーンとグルジスターンは自治あるいは独立を取りもどすことができた。チュールパーン朝、ジャライル朝は、クル河以北には駐屯軍を置くことができず、一時的に遠征軍を派遣する以上のことは不可能であったので、両国に宗主権を認めさせるのみに甘んじなければならなかった。

結 語

本稿はイルハン国のモンゴル人部族遊牧地分布解明の観点から、北辺防備のためにタル河、アラス河流域に配置されていたモンゴル軍に着目し、クル河支流アク・スーに沿って設けられた要塞スイバとその駐屯軍について、またダルバンドの前線を防備するためシルヴァーン地方に駐屯する軍隊、グルジスターンのクル河、アラス河流域に置かれていた軍隊の遊牧地と領袖の出身、経歴について知るところを述べたものである。

イルハン国の対ジユチ・ウルス防衛の中心であったスイバは、最初にフラグが設けた陣地で、アバカは一二六五年、これを恒久化するとともにアク・スー下流のダラン・ナウルから上流のガルドマンまで延長した。当初はここにグルジア兵、ムスリム兵とともにモンゴル兵が冬期間駐屯していたが、アブサイドの末年には、この方面における人員の

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

不足が深刻な問題となり、イル・ハンに取つてかわつたチューパーン朝のマリク・アシュラフの時には、スイバもその背後のクル河岸も全く無防備のまま放置されていたので、ジュチ・ウルスのジャニ・ベクリハンに住民の支持もあつて容易に北西イランを占領できた。

シルヴァーン地方とムガリン地方には、フラグの晩年ヤシムト・オグルが派遣され前線地域の防備に當つた。ガザン・ハン期にはシルヴァーンとグシュタスファイーに多くのモンゴル軍イクターが設けられ、ヌーリン・アカ、その死後はクトルグ・シャールがヌッラーンに駐屯してダルバンド方面防備の最高司令官をつとめた。アブー・サイドの時代には、北にザンギー、南にタルムターズ二人の万人隊長が派遣されていた。前衛万人隊と呼ばれていたシルヴァーン駐屯軍は、一三一九年にはイキンジ、一三三六年までにはその子シャイフ・チューパーンに与えられたが、シャイフ・チューパーンは、一三四三／四年アーゼルバーイジャーンに移動し、シルヴァーンの防備は放棄された。

スイバの西南グルジスターンのモンゴル軍は、前線に近いクル河水系域に駐屯するものと、首都に近いアラス河水系域にユルトを有したものとに二分される。グルジスターン地方軍とみなせるのは前者である。グルジスターン軍司令官の地位は、シラムン、アリナク、クトルグシャール、クルミシ、シャイフ・マフムード、イクバル・シャール、大ハサン等が次々とうけ継ぎ、特定の家柄が独占することはなかった。チューパーン朝が成立すると同家のスルカン、ピール・フサイン、同家外のアミール・ジダイ時がこの地位にあつたがマリク・アシュラフのために除かれた。こうしてグルジスターンにはマリク・アシュラフに対抗し得る強力なモンゴル軍は存在しなくなった。

またアラス河水系域には、コンギラト氏、ドルベン氏、旧ケレイト王家の三附馬家があつたが、いずれも解体された。モンゴル軍移動の後、シルヴァーンとグルジスターンの土着政權は独立の途を歩きだした。シルヴァーンではシャマ

ハとシャー・バラーンの領主 *hakim (malik)* であったカーウスが伝統あるシルヴァーン・シャーの王号を称し、グルジスターンではグルジア王ギオルギ光輝王が西グルジア、クタイスイ *Ktatsi* 地方の王国と西南グルジアのサムツへのアタベク領を統合した。両国はイル・ハン国の後継者国家であるチューバーン朝、ジャライール朝に対してある時は宗主権を認めて従属し、ある時には公然と敵対さえした。

これは、イル・ハン国崩壊後のシルヴァーン・シャー国、グルジア王国が、ヘラートのクルト朝、南イランのムザッファル朝のようにモンゴル・トルコ系の遊牧部族をも政治的、軍事的に掌握して成立した政權ではなかったことを示している。

イル・ハン国のモンゴル系、トルコ系の軍隊と彼らの家族は長く遊牧生活を捨てず、イル・ハンによって指定された夏冬の遊牧地の間を移動した。彼らは職能的戦士集団ではなく、家族と家畜をとめない、再生産の体系を有していた。牧地をめぐっての定着農民および先住遊牧民との関係、また穀物と手工業製品供給のための農村および都市との交流は、社会経済史、社会史上の興味あるテーマであるとしても、本稿で用いた史料と方法では、知ることができない。特にヒューマン・エコロジーの面からの実態は同時代史料からは分析できず、後世の実地調査にもとづいた研究から類推するに留まろう。⁽²⁵⁾

モンゴル人は単に軍人と言うだけでなく、イル・ハン国の一等市民であったから、彼らの領袖はイル・ハン一族と通婚し、一種の貴族階級を形成し、様々な官制の要路を占めた。従って千人隊、万人隊の指揮権と部族支配権の継承をイル・ハン国全土について明らかにすれば、イル・ハン国政治史の多くの側面が現れてくるであろうし、それ以降のイラン政治史の展望も開かれるであろう。本稿に述べた地域に関しても、建国以来の集団が次第に解体あるいは移動して、最

終的にはチューパーン朝、ジャライール朝に対抗し得る勢力が残らなかった事情を示すことができたのである。

しかし、それに先だつて千人隊、万人隊そのものの制度的研究が必要であると思われる。この人事、組織がどのようなものであつたかの具体的全体像を示さないで、特定の個人の昇進、降格等の記事を追つても、国家組織に関する知識は得られないであらう。⁽²⁶⁾ 本稿で仮にシルヴァーン軍、グルジスターン軍と呼んだものの姿が明瞭でないのもそのためである。⁽²⁷⁾

ここに記した軍隊は、北西イランに駐屯していたものの極一部にすぎない。一例をあげれば、ウルジェイト・ハンの宮廷の二五名の大將軍 (umara'i buzurg-i chag-i Ujratu) 中、ホラーサーンの四名、ルーム、ディヤルバクル、バグダードの計五名を除いた一六名中の四名 (チューパーン、イレンジン、タルムターズ、トゥクマク) について言及したのみである。イル・ハン国の全土について、また軍隊組織の全体について同様の検当を行い、イル・ハン国の国家構造と土着社会支配体制を俯瞰することは今後の努力に期したい。

註

(1) グルジスターンは、グルジア (Pyc. Гpия) 'ジョージア (Eng. Georgia)' 自称 (Sakartvelo) のベルシャ語の表現である。イル・ハン国のグルジスターン州は、セルジューク朝以前とは異つて、グルジア・バグラト朝の領土から成つており、大アルメニア州の一部も含んでいる。また、イスラーム地理学の習慣では、西部グルジアをグルジアの他の地域と区別してアフハーズ (Arab, Pet, Abkhāz) と称する (Musta'fi, *Nozhat*, 108)。また、シルヴァーンは今日のソ

連邦アゼルバイジャン共和国の北半、クル河以北の地の歴史的叫称であるが、ダルバンドとグシュタスフィーが別個の地方として数えられる場合もある。

(2) フラグの時代にホージャ・アズィーズ (Khvāja 'Aziz) がトビリスィ (ティフリース) の徴税官 (vali) であつたことがあり (Brosset, 556, 563; Пашир/Амизаде, III, 88)。また、ジャライール部人ブグン Bughūn がグルジスターンのシャフネ shahna であることがあつた (Пашир/Амизаде, I, 135-6)。イル・ハン国は両職によつて支配地の行政的掌

握を行った。

- (3) 本田實信「ガザン・ヘンの税制改革」『北海道大学文学部紀要』第一〇号、一九六二年、同「イルカン国におけるイクター制について」『北海道大学文学部紀要』第七号、一九五九年
- (4) ルストレインシは、(Le Strange, 177) シルヴァーンに南接するアッラーン地方のトルコ化は、モンゴル人の侵入期に始り、チュール朝に完成したとする。
- (5) 本田實信「イルヘンの冬営地・夏営地」『東洋史研究』第三四巻第四号八一一〇頁。
- (6) V. Minorsky, "Mongol Place-names in Mukri Kurdistan," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. XIX, no. 1, 1957; Enteshārāt-e Dāyerā-e Joghrafiyāyi-ye Setād-e Ardeš, *Farhange joghrafiyāyi-e Iran*, I-X, Tehran, 1949-1954
- (6) シルヴァーン、グルンスタイン関係の戦乱の記事に名前が見える武将は次のとおりである。
- ①一二六二-三年の対ベルケ戦、Shirāmūn(前衛), Samāghār(同上), Abātāy(同上), Īlkāy, Tūdān, Bātū, Saīdāy, Chaghān, Bulārghū, Dūghūn, Sultān Jūq (Рашид/Ализаде, 111, 87-8; Mustaufi, T. G. 509; Banākāti, 424-5)
- ②一二六五年の対ベルケ戦、Yashmūt Ughūl, Qūtū-

Buqā, Taghachar (Рашид/Ализаде, 111, 103-4)

- ③一二六九年のタグダル・ノグタルの乱、Shirāmūn (Sirmon), Alināq (Aliqan), Qurmishi (Qour-moutchi), Abātāy (Там же, 112; Brosset, 577, 578; Mustaufi, T. G., 591)
- ④一二七一年のイメン・チア遠征、Sirmon, Aliqan, Taicho, Abatchi (Brosset, 585)
- 一二七三年のイメン・チン遠征、Sirmon, Alican (ibid., 585)
- ⑤一二八八年の対トゥレンカ戦、Būqā Jinksān, Qunjuqbāl (前略) Рашид/Ализаде, 111, 208
- ⑥一二八九年の対トゥレンカ戦、Tūkāl (前衛), Shiktūr b. Īlkāy, Qunjūqbāl (前衛), Tagajār, Tughrilja, Tāijū b. Būqū, Chūbān (там же, 221; Mustaufi, T. G. 598)
- ⑦一二八九年イメン・チアに出兵、Quntchiba fis de Sirmon Noīn, Qourmtchi fis de Aliqan (Brosset, 607)
- ⑧一二九六年のアルスラン・ノグタルの乱、Chūbān, Sūlāmish, Qūrmishi, Tughrilja, Tāytāq, Ilbāsmish (Рашид/Ализаде, III, 305; Mustaufi, T. G., 603)
- ⑨一二九五年のグルン・王タグ・ノグタルの区配、Khoutlou Chah, Siboutchi filis de Khoutlou Chah, Qourmtchi, Arpha frère de Qourmtchi, Alinji (Brosset, 619, 621, 625)

- ⑩ 一三二八年クルジア王ギオルギの即位援助, Zaal-Melik, Akhrountchi frère du père de Tchopan (ibid., 642)
- (7) V. Minorsky, *A History of Sharvan and Darvand in the 10th-11th century*, Cambridge, 1958; C. O. Хан-магомедов, *Дербенд (Горная стена Аулы Табасарана)*, Ленинград, 1979
- (8) Рашид/Ализаде, 111, 87-89; Vassāf, 49-50; Mustaufi, *Ta'rikkh-i Guzida*, 590; Bānākati' 424-5; Dulaurier, 505-6; d'Ohsson, III, 379-383 佐口訳第五卷三七一一二頁; Howorth, Part II, div., 1, 113-116, part 111, 193-199 Boyle, *Dynastic.*, 352-354; Ализаде, 318-320
- (9) Рашид/Ализаде, 111, 103-104; Vassāf, 51; Mustaufi, *Ta'rikkh-i Guzida*, 591; Bānākati, 427-428; Dulaurier, 1858, Juin, 508, 1860, Oct.-Nov., 310-311; d'Ohsson, 111, 418-419; Howorth, part 1, div., 1, 123-124, part 111, 223-224; Boyle, 354; Ализаде, 320-321
- (10) ヴァッサーンの年代記に付されている『ヴァッサーン語彙集』には, 「sibā 及び sibah はトルコ語で壘壁 divār-i bast を言う」とある (Vassāf, 681; cf. Ализаде, 321)。モンゴル軍はベクタート包囲戦でも siba を設けた (Boyle 348)。ブロッセは siba は “un retranchement” を意味するアラブ語であるとする (Brosset, 569-570 n)。しかしこの語は

元来『壘』を意味するモンゴル語である (D. Lessing, *Mongol-English Dic.*, Berkeley and Los Angeles, 1960, p. 694)。また陸軍省編纂古語大辞典、蒙和の部、中、九九九頁には, “Sibeg, sibegen” に①生籠②欄柵③堡壘の訳を与えている。

- (11) クルジア語文献に見えるサコ Sako について cf., K. P. Кикнадзе, К разъяснению одного географического названия в сочинении грузинского анонимного историка XIV века (на груз. яз.), *Грузинское Источниковедение* 1, 1973
- (12) 中世フランス語テキストには, “fouées e autres tranchés” ラテン語テキストには, “magna fossata et alia munimenta (p. 336)” とある。
- (13) ガルトマンは『集史』には, “dasht-i K. r. d. mām” であり、『シャイフ・ウウアイス史』には, “sahrā-i K. r. d. mām” となっている。地図に見る限り、アク・スー流域は、アク・スー市附近より山地となっている (World Aeronautical and Operational Navigation Chart, Produced by SPS, RE in 1967 from PC F-4c Base 100, 1965, Baku) ので、平野という表現が妥当であるかには疑問が生じよう。なお Gerdman, Gardman という地名はコーカサスの各地に見られる (V. Minorsky, *Studies in Caucasian History*).

- London, 1953, 29-30, 66; P. Hovhannesian, *Haikastani Berde'e*, Venice, 1970, 478-480; H. Hübschmann, *Die Altarmenischen Orismenen*, Amsterdam, 1969, 352; Л. А. Чиганшвили, *Город в Феодальной Грузии*, 1968, стр. 51) この地域で野外踏査を行ったアゼルバイジャン科学アカデミー歴史学研究所々員は、このあたりには多くの遺跡があり、発掘しなければ特定は根難であると述べた。
- (14) この語は中世アルメニア語には見られない。モンゴル・トルコ語の /s/ /sh/ は、アルメニア語に入る際相互に交替する例があり (例 M. Shiremun 人名 / Arm. Sirmun) 、“またアルメニア語字母 he (無音の h) と ray (軽い r) は形がよく似ている。また、デョロリエ訳の転写は西部方言によっているから、東部方言では shibar と表記される。すなわち “siba” である可能性がある。
- (15) サマグル・ロノヤンは一二七七年春にトゥグ、トゥダウンの両武將がアブルスターンで戦死した後、ルームに派遣された Рашид/Almazade, III, 102; cf. Faruk Sümer, “Anadolu da Moğollar”, *Selçuklu Arastirmalari Dergisi*, I, 1969, p. 566-61-62) メングテムルも一二八二年にモースルで死亡した (Рашид/Almazade, III, 164)
- (16) ヘラートの君主シャムステディーン・クルトは、六七五 (一二七六/七) 年オールドにおり、彼の息子ロクヌッディーン

北大文学部紀要

- ンはダルバンド防衛軍に編入されていた (The *Ta'rih Nama-i Hark of Saif ibn Muhammad ibn Yaqib al-Harawi*, ed., Muhammad Zubayr as-Siddiqi, rep. Tehran, 353-4)
- (17) アルターンはアラーン Alān と読むべきであらうか。
- (18) ヴァッサーフも、ガザンは第一次シリア遠征 (一二九九—一三〇〇年) に先だって、キシエラークの地バグダードで、ヌーリ・イブン・ダルバンド、バクラー、アッラーンの守護を命じた」と記す (Vassaf, 373)。
- (19) ヌーリン・クトルグ・シャー両者の出自経歴については、志茂論文、一一三—六頁、八三—五頁を参照せよ。
- (20) 『集史統篇』にも「これに先だって、スルターン・アブーサイドの側からバルミヤーズ Barmiyaz が数部隊の兵士と共にその方面に派遣されていた」とある (Hafiz-i Abrū, 134)° Barmiyaz は Tarmīzaz が正しい。彼の出自については cf. Fr. Sümer, loc. cit.
- (21) *Советский союз, Азербайджан*, Москва, 1971, 34-35; *Советский союз, Грузия*, Москва, 1967, 34-35; *Советский союз, Армения*, 1966, 36-37;
- (22) チョルマクン・ロノヤン系の軍隊についても、志茂碩敏氏が論文を発表されるはずである。
- (23) スワイリリーは、タズ Taz がクルミシの有していたタバリ

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍

スターンの指揮権を継いだ (dOhssoon, IV, 542, 佐口訳第六卷二九六頁) とするが、タバリスターンは、明らかにグ

(ク) ルジスターンの誤りである。

(24) カールウスはカラバグに侵入して多数の捕虜をもたらしたが、これはかつてセルジューク朝の支配から脱したグルジア王国がクル河中、下流に多数のキプチャク人を入植させたと同じく、シルヴァーン各地の荒蕪地に植民させるためであったろうと思われる。モンゴル遊牧民の移住、ジュチロウルス軍の侵入によって、シルヴァーンの農村は荒廃し人口も減少していたと推定できるからである。(L. P. Petrushevsky, "The Socio-Economic Condition of Iran under the Il-Khāns," *The Cambridge History of Iran*, vol. 5, Cambridge, 1968, p. 499. Армазаре, стр. 254.)

(25) R. Tapper, *Pasture and Politics-Economics, Conflict and Riwar among Shahsevan Nomads of Northwestern Iran*, London, 1979 は実地調査にもとづいたシャーフセヴァン族社会の分析であり、同じ著者の "Shahsevan in Savavid Persia", *B. S. O. A. S.*, XXXVII, 1974 は、この集団の起源に関する歴史的研究 "Shahsevan (Qaraqūyūn lūhā-Aqūyūn lūhā), *Barrashā-ye Tūrki*, Vol. III, Nos. 5, はトルコ系部族のイラン移住から二〇世紀初頭に至るシャーフセヴァン族社会の歴史的概略を示したものである。

る。また B. M. Шамагдзе, *Хозяйственно-культурный и социально-экономические проблемы скотоводства Грузии — историко-экономическое исследование*, Тбилиси, 1979 には、グルジア国内の種々の牧畜について述べられている。これによると現在グルジア国内で大規模な遊牧が行われているのはトビリシの南方、アハルツィへの周辺、ミンゲチャウル湖の北岸の三個所で、いずれもクル河本流域である。

(26) イルロハン国末には、国初に存在したであろう厳密な十進法にもとづいた部隊編成は崩れていたように思える。アブーサイドの後に千人隊 (ハザール) にかわって部隊 (コンション) の部が用いられるようになったのは、十進法にもとづいた部隊の呼称が兵員の実数を示し得なくなったからではあるまいか (間野英二「モグーリスターン遊牧社会史序説」『西南アジア研究』一七、二六頁、羽田正「サファヴィー朝の成立『東洋史研究』三七卷二号、二一六頁参照)。

(27) 本稿で知り得たグルジスターンにユルトを有していた千人隊、万人隊の司令官の地位の継承関係を次図に示した。

補註

(28) アゼルバイジャン・ソヴェエト社会主義共和国に於けるモンゴル語地名研究には以下のものがある。Генбуртаев, Г. А., *Словарь географических терминов Азербайджана*.

Hayton, *La Flor des Estoires d'Orient*, (*Recueils des Historiens des Croisades, Documents Arméniens*, II, Paris, 1906, pp. 113-235, ラテン語訳 pp. 255-367

Howorth, H. H., *History of the Mongols*, London, 1880

Juvaini, 'Alā' al-dīn 'Ata'-Malik, *Ta'rikh-i Jahān Gushā'*, Ed., Mirzā Muḥammad Qazwini, vol. I, Leiden and London, 1912

_____, tr. J. A. Boyle, *The History the World-Conqueror*, vol. I, Manchester, 1958

Lang, D. M., "Georgia in the Reign of Giorgi the Brilliant", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XII, 1955

Le Strange, G., *Lands of Eastern Caliphate*, London, rep. 1966

Manandian, H. A., *The Trade and Cities of Armenia in Relation to ancient world Trade*, Lisbon, 1965

Minorsky, V., *Studies in Caucasian History*, London, 1953

Mustaufi, (Ḥamdallāh Mustaufi Qazwini), *Nuzhat al-Qulūb*, Ed., M. Dabir Siyāqī, Tehrān, 1336

_____, (T. C.) *Ta'rikh-i Guzida*, Ed., A. Nabāi, Tehrān, 1339

Nabāi, Abū al-Faḍl, *Chūpāniyān dar Ta'rikh-i Ilkhāniyān yā Tārikh-i Āl-i Chūpān*, Tehrān, 1352

d'Ohsson, C. M., *Histoire des Mongols*, The Hague and Amsterdam 1834-35; 佐口透『モンゴル帝国史』I-VI, 1967-9年

Qāshāni, Abū al-Qāsim 'Abd Allāh b. Muḥammad al-, *Ta'rikh-i Ūljāitū*, Ed. Mahin Hambli, Tehrān, 1348

Samarqandī. Kamāl al-Dīn 'Abd al-Rassāq, *Maṭla' sa'idaini va Majma' bahraini*, qismat-i avval, Ed., 'Abd al-Ḥusain Navāi, Tehrān' 1353

Vaṣṣaf (Vaṣṣaf-i Ḥaḍrat), Sharaf al-Dīn 'Abd Allāh, *Kitāb-i tajziyat al-amṣar wa tazziyat al-a'sar (Kitāb-i Vaṣṣaf)* Bombay, 1269 (1852/3), rep. Tehrān, 1338

Ализаде А. А., *Социально-экономическая и политическая история Азербайджана XIII-XIV вв.* Баку, 1956

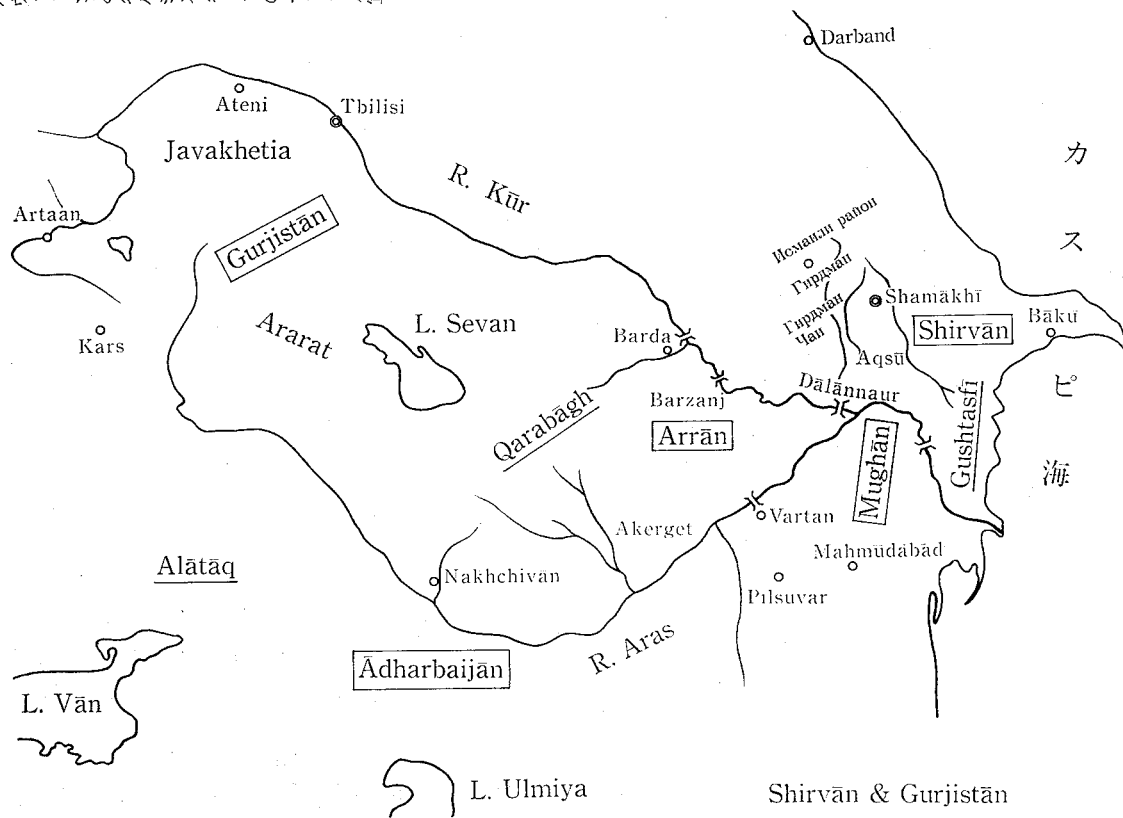
Патканов, К. П., *История Монголов по армянским источникам*, вып. 1, 1873, С-Петербург

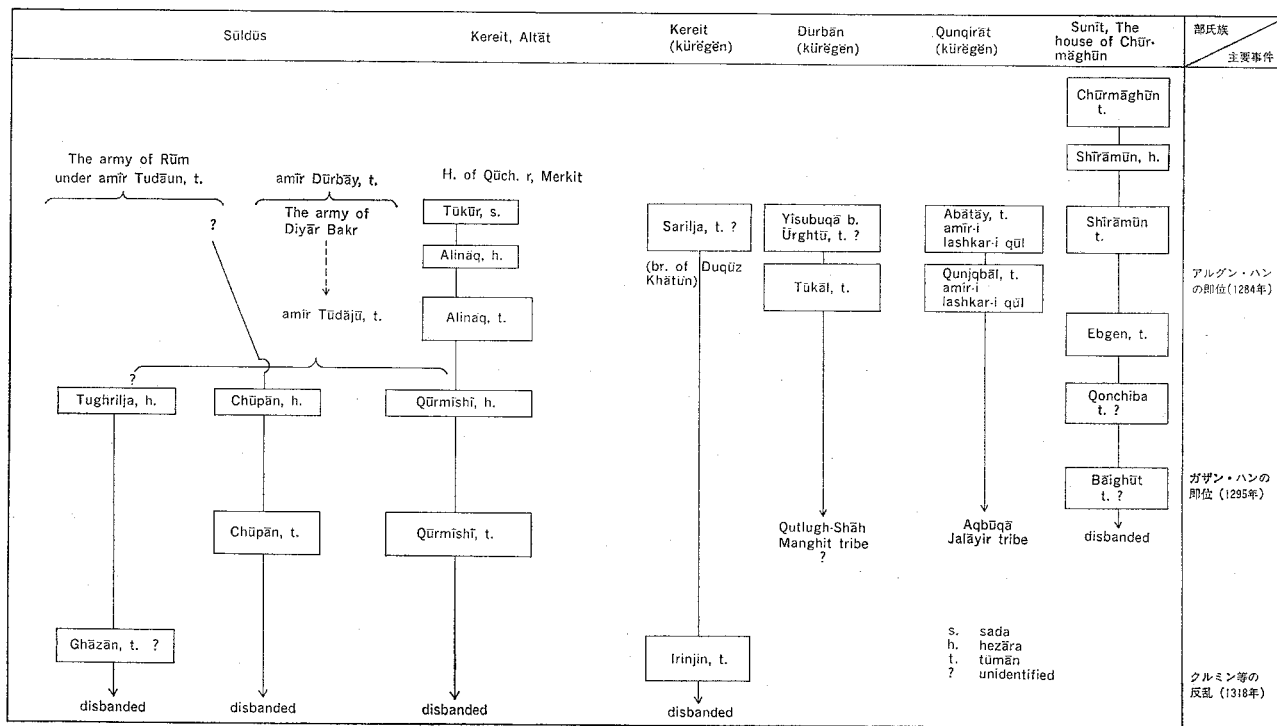
Рашид ад-дин Фаздуллах, *Джами-ат-Таварих*, А. А. Али-заде, сост., т. I-і, Москва, 1975; т. III, Баку, 1957

志茂碩敏「Ghāzān Khān 政権の中核群について—Il-khān

国史上における Ghazān Khān 政權成立の意義——『フジ
ヲ・フツリカ言語文化研究』18号, 1979

付記 本稿の骨子は、一九七八年十一月、アジア文化研究
会で発表し、列席された志茂碩敏氏、花田宇秋氏に御批判を
いただいたので、ここに謝辭を述べる。





The armies in Gurjistan